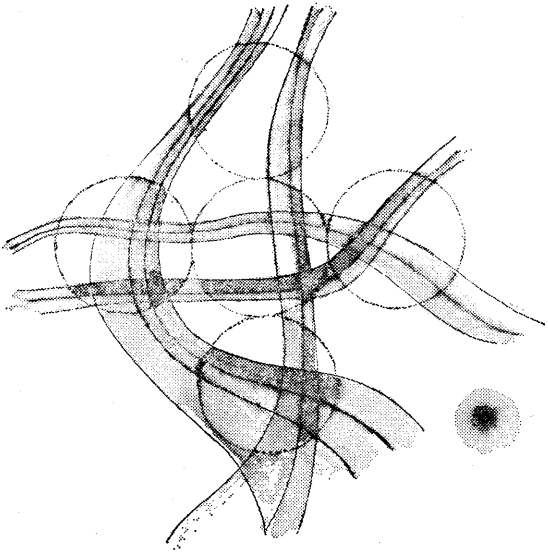
SF的読み解き
子どもという風景

第十回　子どもの古今集



堀内　守

I

アルバムを眺めていた子どもが顔をあげて、母親の眼の中をじいっと見つめて言った。

「どうしてあたしの写真の数とお兄ちゃんの写真の数がこんなに違うの？　あたしのはお兄ちゃんの写真の半分もないよ。

半分よりももっと少ない。おかしい。何かあるな。きっと。」

きめつけるような口調で言われたものだから、若い母親はたじたじとなった。そのため何と答えていいか、一瞬とまどいを見せた。

「だって……」

子どもはまだ眼を放さなかった。口もきっと結んだままである。この顔つきはこの子が突然大人びた問いを発するときの前ぶれである。母親はそれを予想したから、「だって……」だけでは切り抜けられぬことを知って嘆息をついた。

「だって、事実はこのとおりなのよ。お兄ちゃんの写真はたしかにあなたの写真よりも多い。それはたしかです。だから、事実としてそうあるということを素直に認めてちょうだい。それ以上の意味づけをすると事が面倒になるから。」

そう弁明しながら若い母親は心の中であっと声をあげていた。これではまるでこの子の次の問いを誘発するような言い方ではないか。ここのところをこう衝いてくればよいと誘っているようなものだ。

案の定、子どもは落ち着き払ってことばを切った。

「ではうかがいますがね――」

その声がまるで大人の声のように響いたので、母親は思わずあたりを見まわした。子どもの語彙が急に変わったのはその時からである。

「その事実を前にしてあとから意味づけても仕方がない。それよりも、何がこの事実を生んだのか、それを説明してほしい。結果の方よりも、動因の方をききたいのだ」

あまりむずかしいことばを使うものだから母親の方は眼をパチクリとさせた。すると、子どもは少しことばをやわらげ、ついで幼児のことばに戻った。

「ねえ、ねえ、どうしてあたしの写真の方が少ないの？なぜだか教えて。わからなかったらパパにきいてみるけど。それでもいい？」

「そうね。こういうことはきっとパパの方がうまく説明

してくれるだろうね」

とは応じたものの、母親の方もこの問いに答えるのはむずかしいと予想できた。しかし、ともかく、子どもの矛先はほかに移ったのである。母親はほっとして、読みかけていた本をひざの上にとりあげた。

ほっとする間もなかった。

子どもはまた問いかけたからである。

「食事のとき『いただきます』と言ってから食べるね。あれはだれに向かって言うのかなあ」

母親は、本を読んでいるふりをした。子どもの言い方が半分は独言にきこえたからである。独言なら勝手に答えをさがしているに近い。それを楽しんでいるのだろうと母親は見当をつけた。

「おかしいな。いったいだれに向かって言うのかなあ」

子どもはまたそう言った。腕組みまでしているようである。そうなると、急に大人びた問いに移るはずだ。そう思ったので母親は子どもに「ケーキでも食べましょうか」と声をかけた。こうすれば、疲れないでもすむと思ったのだ。

子どもは、「うん」とあいまいにうなずいた。「だれに言うのかな」とまだつぶやいている。

「ケーキを食べてもいいけれど、そのときでも『いただきます』と言わなくちゃ食べさせてもらえない。それはいったいだれに向かって言うのだろう。出してくれたお母さんにか。否、彼女は出してくれただけだ。製造したのではない。製造した人だって、その材料のすべてを自分でつくったわけでもない。水は、ガスは……となると、だれがつくったのかもわからない……」

母親はケーキを出しながら昔子どもだった頃、自分の祖母たちが口ぐせのように言っていたことばを思い出した。

「『いただきます』というのはな、ありゃァだれに向かって言うことばなのだろう」

「そうさな。あれは、なんだ。オテントサマに向かって、お礼を言うんだろうよ」

そんな会話だった。そこに出てくる「オテントサマ」

は、ことばのひびきがやわらかだった。しかし、その意味は彼女にもまだわからなかった。物心ついてから、それが太陽のことを指しているのに気づいた。しかし、「オテントサマ」は、「太陽」のごとく科学的な文脈では使われてはいない。むしろ、神話的な、物語的な意味あいで擬人化されていた。

これを使って答としてみようか——母親は一瞬そう考えた。しかし、昔と今とは違う。この子に「オテントサマ」と語ったところで、納得することはないかもしれない。母親はそう思い込んだ。

「昔と今とは違う」。この言い方でいろいろな事態を切り抜けてきたつもりであった。

ふと、「違い」ばかりが強調されてきたように思えた。似たところ、共通するところもあるはずではないか。こういう疑問が湧きあがってきた。

子どもの方はそのとき本当にヒトリゴトを言っていた。

「どうしてあたしの写真がお兄ちゃんの写真よりも少ないのかな。『いただきます』というのはだれに向かって言うのかな。だれか知ってるかな。」

まるでうたっているようにきこえた。

母親は急におだやかな顔つきになった。そしてこう言った。

「あたしの写真の方がお兄ちゃんのよりも少ないのはね。パパもママも初めて赤ちゃんをもったので珍らしかったからよ。珍らしかったし、また不安だった。だから、その時ごとに、『やっと、ここまで大きくなってくれたか』という思いをこめて写真に写したの。それに対し、あなたのときはね。もう、どのようにして大きくなっていくか、パパもママもお兄ちゃんを育てたからわかっていた。だから自信をもって育てたの。写真が少ないのはそういう自信のあらわれなのよ」

母親はまるで自分の声のようでない自分の声に驚いていた。ことばが勝手に口をついてとび出してくるようであった。子どもの方も母親がいつもより長く、かつすらすらとしゃべっているのに驚いていた。そして納得し

た。

「そうだったのか」と思った。すると、急に気分がすうと軽くなり、浮き浮きしてくるのだった。

「ママ、わかったよ。そちらの方はよくわかったよ。まるで、真綿のふとんの上にふわふわと浮かんでいるような気がするよ。ふとんのような答えだね」

II

子どもは当分の間「いただきます」に関する疑問を忘れていた。ということは、食事のときには気易く「いただきます」と言ってから箸をとっていたことを示している。それが五日ほど続いた。母親の方もその間にその問いのことを忘れた。忙しかった。次から次へとやるべきことが押し寄せてきた。

洗濯物がふえた。夫の出張が重なった。自分の母親がその間にやってきた。親子水入らずというよりも、家の中が急に不安定に見えるようになった。老母はやたらに家の中を片づけ始めた。黙々と掃除をやり、黙々と片づけた。最初のうち、よくやってくれると思っていた若い母親も、二日もすると老母の気づかいがわずらわしくなってきた。子どもは老母になつき、甘えをおぼえた。

甘ったれている間は、あのようなむずかしい問いは生じないだろう。もうしばらくは大丈夫だと若い母親は安心していた。

朝食のときだった。

子どもは黙って食べはじめた。

「おや、『いただきます』はどうしたの」

そう老母がたしなめた。子どもは老母を見あげ、「あ、いけねえ」というように首をすくめ、『いただきまあす』と言い直した。

「いつもそう言ってから食べるものだよ」と老母がやさしく言った。

「いつもそうしているよ」

と子どもが応じた。

若い母親がことばをついだ。

「いつもそうやっているよね」
食事が終わった。子どもは自分の食器を台所の洗い場まで運んでいき、「ごちそうさまでした」とくり返した。老母は「ごちそうさま」と応じた。
子どもがすかさずたずねる。
「ねえ、おばあちゃん。『ごちそうさま』ってどんな人？」
「『ごちそうさま』か――
それはね、きっとにこにこした人だと思うな」
「おばあちゃん、見たことある？」
「あるよ。あるとも。毎日出あっているさ。こうして、まいにち三度三度のものをいただいていられる。おかげで食べるのがおいしい。ありがたいことだと思ってね。いつも『ありがとさん』というつもりで感謝しているのさ」
「『ありがとさん』はどんな人？」
「そうさ。にこにこしているな。怒った人からは逃げていく。感謝している人のまわりにはいつもいる。」
「ふーむ。わたしには見えないがなあ。」
「なーに。見えるものがすべてじゃない。見えぬもののなかにも大事なものがたくさんあってな。」
いつもなら何とか理屈をこねる子どもがこの日ばかりは感心してうなずいている。おかしなこともあるものだと若い母親は安心していた。会話は続いている。
「見えぬもののなかにありがたいものがあると昔から言うよ」
「ふーん。昔からね」
子どもの心には「昔」がずっしりと重いものに思われた。「昔」と「今」しかない。「昔」は「今」よりもずっと重く、自分の力ではそうたやすく修正することもできない。その「昔から」そうときまっているのだとしたら文句を言えたものじゃない。
若い母親はこの会話のなかに割り込んだ。
「『いただきます』って言うのも、昔からそう言うようにきまっているのよ」
すると子どもはけげんそうにふり向いた。

「おかしいな。昔なら何にでも『さま』をつけたり、『さん』をつけたりするのでしょう。それなのに『いただきさま』とはだれも言わないね。

これはきっと、昔の言い方じゃなくて、今の言い方だよ。」

老母がこれを引きとった。

「うん、うん、なかなかかしこいところがある。面白いところに眼をつけた。昔は『さま』が多いとはたしかにそうだ。」

老母がしきりに感心するので、子どもは少しテレくさそうに頭をかいた。

老母は老眼鏡をかけた。そして目をつぶった。子どもは驚いた。眼鏡をかけて目をつぶるなんて、どこか変だと思ったからである。

「すぐに答えが見つからないときは、こうやって目をつぶって考えるのさ。そうすると答えが向うから走り寄ってくる」

子どももマネをして目をつぶった。

目の前に赤い光がちらちらしているようだった。考えるということは大変なことのようである。

あくびが出た。

「何かいい考えがまとまったかい」

老母がこう問いかけた。子どもは「ううん、何も」と答えた。

「無理しないでおけ。考えがまとまらんときは、そのままでいなさい。波に浮かんでいるように、五体の力を抜いて。力まないで波のまにまにただようのさ」

子どもはますますわからなくなった。が、雰囲気は伝わってきた。何となくわかる。ただうまく表現することはむずかしい。しかし捨てがたいのだ。

Ⅲ

夕食の時だった。

子どもはおばあちゃんの口の動かし方をじっと見ていた。もぐもぐと口を動かしているおばあちゃんは小さく

見えた。昼間見たときよりも小ぢんまりとして見えた。
こんな小さなおばあちゃんからママのような大きな人が生まれたのか。子どもはそう思って母親の方も見た。
「きょろきょろしないで食べること」
母親はそう注意した。
「お前は少しきびし過ぎるよ。そういちいちやいのやいのと言うもんじゃないよ」
と老母が言う。
ひとしきり、皆黙っていた。電話のベルが鳴った。母親が出た。
「パパからかな」と子どもがつぶやいた。
「そうだろうな」と老母が応じた。
若い母親は機嫌よく戻ってきた。
「明日帰るんですって」
「そうかね。それじゃ、あたしもそろそろおいとましょうかな。」
「行きちがいになっては困りますよ。一晩ぐらいいっしょに話していってくださいな」
『うん。でもね……」
子どもの方はそういう会話を物ともせず、壁のテレビを眺めていた。クイズがはじまっていた。そちらに夢中になっていたので、二人の会話が耳に入らなくなった。
「何だな。この子のお兄ちゃんが死んでからもう三年になるね。すると、この子はもうあの時のお兄ちゃんのトシになったわけか。よく似ているから、まるで生きかえってきたみたようでね。」
「きょうもまた、こっそりとお兄ちゃんの写真を出して眺めているんですよ」
「ふーん。そんなになつかしがっているのかね」
「いいえ、そうじゃなさそうでね。お兄ちゃんの写真の数を数え、自分の写真とくらべてるんですよ。そのあとで、『どうしてお兄ちゃんの方がこんなに枚数が多いのか』と訊くのですよ」
「へえ。そんなに数えられるのかねえ。ざっと見ても何百枚というくらいの差がありそうなのに、こんなトシで数えあげられたのかしら」

「ちょっと変ね。変だといえば、時折大変むずかしい質問もしかけるの。あたしなんかたじたじとなってしまいそうな質問で、ハラハラさせられることもあります」
「かしこくなった証拠じゃないの。いいことだよ。知恵がついているのだよ。きっと。」
「お母さんは何でも好意的に解釈なさるからそんなことが言えるのよ。わたしの立場にもなってみてくださいな。『いただきます』とはだれに向かって言うのか、なんてたずねられたって、どう答えていいやらわかりませんよ。昔のように、『そりゃ、オテントサマにするのさ』と答えても今の子どもは納得しないでしょうからねえ」
「そんなことはないよ。子どもは昔であれ、今であれ、同じような答えで満足する。なんならやってみようか」
こうして、子どもはテレビからひき離されたのである。わけもわからぬうちに、説明がはじまった。
「あのね。いいかい。食事をいただくときにはね。『いただきます』と言うだろ。あれはオテントサマに向かって感謝するつもりで言うのだよ」
子どもはけげんそうな顔を向けた。おばあちゃんが突然変な説明をはじめたからである。なぜこんな説明をはじめたのか、子どもは筋がのみこめなかった。それで口をきっと結んだ。
いつものように、それとともにむずかしいことばが子どもの口をついて出てきた。
「オテントサマか。森羅万象。万有。宇宙論」
老母は驚いた。その声は子どものようでなかったからである。まだ変声期には早いはずだが。そう思った。思わずテレビの方へ身を乗り出したくらいである。それは、たったいま耳にした声が、この子の口をついて出てきたのではなく、まるでテレビのアナウンサーでも何か言っていたかのように響いたからである。
「ね、わかったでしょ」
「驚いたね。でもなかなかむずかしいことを言うものだね。シンラバンショウなんて、久しぶりで耳にしたことばだよ」
こんなことが二人のあいだで交わされた。

「何かケジメをつけるのには、かならず何らかの儀式が必要なのだよ。『いただきます』だって、儀式なのさ。自分を超えた何か、家族や仲間を超えた何かに対して訴えたり、告解したりする。それでケジメができる。」

「ケジメね。」

「おかしなことに、ケジメは儀式と切れて独り歩きをすることもある。『いただきます』もそれと同じ動きをはじめたのかもしれないな」

「その虚を衝いてくるのかな、この子は」

子どもはこんな声が耳に入らなかった。彼はいつのまにかすやすやと眠っていた。

「あれ、あれ、こんなところで眠ってしまって。放っておいたら風邪をひくよ」

「まあ、ま、『おやすみなさい』とも言わないで眠ってしまったりして。けれど、いったい『おやすみなさい』とはだれに向かって言うのでしょう。この子の言い分では『おやすみさま』となる方が古風にひびきます」

若い母親は朗らかになって、そう冗談を言った。老いた母の方はそれをまじめに受けとめ、考えはじめた。老眼鏡をかけて、目をつぶって。

しかし、しばらくすると、老母もこくりこくりと船を漕ぎはじめた。

（名古屋大学）